

スポーツの楽しみ

—テニスを事例として—

古 城 建 一*

Enjoyment in sport

—Case Study of playing tennis—

Kenichi KOJOH

Abstract

Taking up 'tennis' as an example, the present author has first analyzed the process of player rallying and then investigated the enjoyment of sporting sprung up out of the process.

In anticipation of hitting real balls, each person usually images his own ideal form hitting or smashing imaginary balls. This the author regarded as the purpose of hitting balls. During the course of self in the real world, which means the trial of realization of purpose.

This realization of the purpose is nothing but self-expression itself. How to enjoy playing tennis is different according to the need of each person, such as getting rid of stress engaging in sports or winning games. In spite of the difference of enjoyment, however, the purpose in this case is all in one; self-expression through the action of hitting balls. Therefore, it can be said safely that the enjoyment of playing tennis is self-expression itself; in other words, an idealistic self imagined in advance in mind is to be realized in the real world of sports. Based on this concept, the author mentions and discusses that to become skillful in sports means to increase the ability of self-expression and that it also deepens the enjoyment of playing tennis in quality.

Key Word : enjoyment self-purpose self-expression

*大分大学 (Oita University)

受理 : 1995年 4月22日

序 論

現代社会は「都市化、生活の利便化等により、身体的活動の機会が減少するとともに、社会の複雑・高度化、高齢化、経済的・物質的豊かさの追求など社会環境や価値観が変化する中で、改めて心身の豊かさや、健やかさが問われている」¹⁾ 社会である。こう考えたとき、健康を高め、うるおいのある生活をきづき、地域社会を活性化させ、よりよいレクリエーション環境の創造²⁾を理念とするレクリエーション運動は、現代社会においてますます大きな意義をもってきている³⁾。

スポーツはレクリエーション運動の一環として重要な位置をしめているが、そのスポーツを文化論の立場から、わが国で最初に体系的にとりあげたのは丹下⁴⁾であった。氏は運動文化という概念を提出し、スポーツの文化的価値と人間形成とのかかわりを運動文化論として展開した。そして運動文化については、「組織、ルール、試合、技術体系、練習体系などをもっている生活様式である」⁵⁾と説明した。唐木⁶⁾は、丹下の提出した運動文化概念を、

- ① スポーツを歴史的・社会的に捉えるための概念として
- ② 現在のスポーツが長い歴史のなかで発展してきた人間にとってかけがえのない価値をもつ文化として
- ③ そしてその価値を実現させるために現状変革が必要なことなどを科学的に実証するための方法概念として意義づけた。

本稿はこのように意義づけられた運動文化論に学び、この考えに立脚してスポーツの楽しみを論考しようとするものである。

考察の対象にはテニスをとりあげる。テニスで楽しみを味わうためには、実際にプレイしなければならない。ここでいうプレイとは、それが練習であれ試合であれ、テニス固有のコートや用具、ルールやマナー、技術体系などの要素で構成された空間において、人がボールを打ち合う⁷⁾ことである。具体的な考察はこのボールを打ち合うことに限定して行う。

1. テニスの楽しみ

テニスに対する価値意識は、人さまざまである。たとえば、心身のストレス解消や健康・体力の維持増進に価値を認める人もいれば、仲間づくり、技能向上、テニス独特の技術課題へのかかわり、勝利や自己の優越性の誇示などに価値を認める人もいる。このような価値意識の違いは、テニスの楽しみ方の違いとして現れる。

人はそれぞれの楽しみ方においてテニスを行い、自分にとっての価値を実現しようとする。この自分にとっての価値の実現過程をテニスの「楽しみ」と考えることにする。したがってまず確認されることは、テニスの楽しみとは個人的・主観的なものであるということである。

人はそれぞれの楽しみを求めてテニスをするのであるが、ここでは健康維持のため、あるいは気分転換のためにテニスをするのだから楽しくできさえすればよく、技術や勝敗はどうでもよいと考える人を想定して、以下でさらにテニスの楽しみを考えてみる。

運動文化としてのテニスは、独特のルールやマナー、技術体系などをもつ。したがって、自分が楽しめさえすればよいと考え、ルールやマナーを無視して勝手気儘に活動しても、テニスをしたことにはならない。かりに彼がその活動を楽しむことができたとするならば、それはテニスとは別のことを楽しんだのである。

また勝敗に無関心を装うとしても、互いにボールを打ち合った結果、一方が失敗するとプレイは一旦停止し、他方に1点が与えられる。これを繰り返した結果、どちらかが4ゲームを先取り勝敗が決定すると、たとえもっとプレイを楽しみたいと願っても、そこでプレイは終了してしまう。それは、テニスがそうした形式でつくられたものだからである。

テニスに対する価値意識は何であれ、テニスの楽しみを味わうためには、誰もがテニスのルールにしたがってボールを打ち合わなければならないのである。こう考えてみると、前に楽しみは個人的・主観的であると確認したのだが、その楽しみ基底にはテニスをする者たちすべてに共通する側面があるように思われる。そしてその共通性は、打球時の目的設定とその実現過程に関連している。以下、このことについて考察をする。

2. テニスの打球と自己目的

1) 自己目的の用語法

スポーツにおける自己目的は、一般にスポーツそれ自体を目的とするという意味で用いられる。しかし本稿では別の意味でこの用語を使用するので、以下にその違いを述べ両者の区別をしておく。

まず、前者について概念する。佐伯⁸⁾はスポーツを文化現象として捉えるための概念装置として、スポーツ文化概念を提出し、スポーツ文化とは「スポーツを構成するスポーツ観、スポーツ行動様式、スポーツ物的事物からなる体系である」(p.71)と述べている。そしてスポーツ観は、「個人及び社会に対してスポーツの存在意義と価値を明示し、その意義と価値を実現するようにスポーツを方向づけ、統制する」(p.76)と述べ、スポーツ手段論とスポーツ目的論の二つのスポーツ観を紹介している。スポーツ手段論については、「スポーツの意義と価値を、スポーツが他の何かの目的を実現し、達成するのに役立つという点に置き、スポーツの手段的な働きによってスポーツを第一義に正当化するスポーツ観である」(p.76)と説明している。また、スポーツ目的論については「スポーツを自己目的的なもの、つまりスポーツ自身の過程の中に意味と価値を持つ活動として捉え、スポーツの内在的価値によってスポーツを正当化するスポーツ観である」(p.79)と説明している。

つまり、スポーツ目的論という自己目的は、スポーツの経験が他の価値に依存することなく、それ自身の価値によって自立的に存在しうることを主張するときの鍵概念と考えてよい。

次は本稿で用いる自己目的の意義について述べる。藤野⁹⁾は労働の目的意識性を考察した文章のなかで、目的とは「一定の手段を用いて実現されるはずの行為の結果が思考のうえで先取りされたもの」と述べている。

テニスにおける打ち合いでは、一々自分の行為の結果を思考しているゆとりなどない。しかし活動主体は刻々と変化する場面においてその都度、即座に、どこへ・どの位のスピードで打球するかを思い浮かべてはボールを打つものである。思い浮かべる内容は、思考の結果ではないとしても脳髓の働きによる結果の先取りには違いない。そこで上述の定義に学び、この思い

浮かべられた内容を目的と考えることにする。

その目的は次項で詳論するように、活動主体が現実の打球に先立って思い浮かべた自分自身の運動像の形を取る(図1参照)。本稿ではこの像を自己目的と呼び、スポーツ目的論や手段論などのスポーツ観とは別次元のものとして区別しておく。

2) 打球における自己目的

自己目的をこのように考えると、打球とは目的として思い浮かべた自分の運動像を現実に表現する、その全過程ということになる。打球がもつこの過程は、技術的習熟度合いに関係なく、テニスをするすべての人に共通する側面である。

以下ではテニスの打球と生産活動とを比較するという方法を用い、自己目的についての考察を深める。生産活動の事例には本棚工作をとりあげる。

打球と工作はどちらも、活動主体が一定の対象に、あらかじめ目的を設定して具体的に働きかけた結果、目的を実現するという過程をもつ。その意味では同質だが、両者の間には表1で示したような違いがみられる。

本棚の場合は、工作に先立ち観念のなかで自分が作りたいと思う本棚の形状や機能あるいは製作手順などを想像する。そして実際の作業により、本棚の現物が現れたとき、目的は実現する。この場合は作業の前に想像された本棚の像が目的であり、現物の本棚はその現実態ということである。

テニスの場合、工作のように物質を作り出すことはない。しかし打球に先立ち、実現すべき自己の運動像を想像する点は、工作の場合と同じである。

三浦¹⁰⁾は未来を想像する点、つまり活動に先立って目的設定するという人間固有の能力を、「世界の二

表1 テニスの打球と本棚工作過程の比較

	テニス	本棚工作
活動主体	相手の打球に対峙する主体	木材という物質に対峙する主体
活動対象	相手の打球したボール	材料としての木材
想像する内容(目的)	相手コートのある位置へ、一定のスピードで打球する自分の像	製作過程および本棚の象
生産物(結果)	自分自身の身体運動および身体の延長物としてのボール移動	本棚という物質

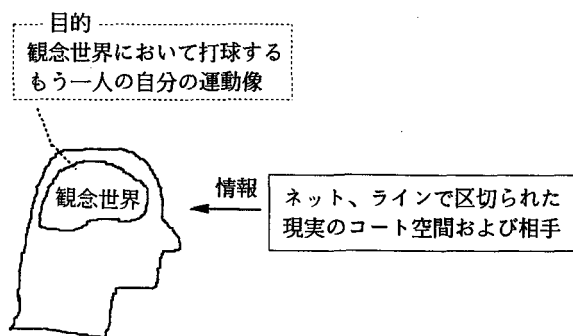


図1 打球における観念世界と自己の二重化

重化と自分の二重化」論として展開した。以下、この二重化論に依拠して上述の運動像を考察する。

図1は、打球における自己目的の設定過程を模試的に表したものである。相手の打球に対峙する主体は、一打一打、線で区切られた地面、ネット、相手などで構成された空間を情報として受け取り、即座に、この情報を彼独自の仕方で再構成し、その空間に独自の意味や価値を与える。これは主体が想像によって、現実とは異なる「世界の二重化」を自分の脳髓の働きとして作りだすことを意味している。この二重化した世界を観念世界と呼ぶことにする。

活動主体が相手コートのある位置へ打球する自分を思い浮かべるのは、この世界における出来事である。この世界で打球するのは彼なのだが、現実の彼ではない。なぜなら、ボールの観念世界の出来事であり、現実の自分がこのボールを打てるはずがないからである。とすれば、このボールを打つのは観念世界に現れた「もう一人の自分」であると考えねばならない。自己目的とは、この「もう一人の自分」の運動像のことである。

現実の自分は観念のなかで、まだ存在していない近未来の世界を二重化した世界として出現させ、その世界で打球する「もう一人の自分」の姿を想像するのである。この「もう一人の自分」が現実世界に現れたとき、つまり現実の自分が実際にボールを打ち、そのボールが目標地点へ移動したとき、観念世界とそのなかで打球する自分が現実世界に実現する。つまり目的は達成される。

打球における目的は、工作のように物質的生産物の想像ではなく、自分自身の運動像である。工作の場合は、自分の外側に物を作りだすため、目的は明瞭な像

として意識される。しかしテニスの場合、通常、人は打球に先だち「もう一人の自分」が観念世界に現れ、そのなかで打球するなど意識しない。それは現実の自分が、観念世界において打球する自分を想像するため、現実の自分と観念世界の自分が重なり合い、両者の区別を意識できないからだと思われる。

3. うまくなることとテニスの楽しみ

テニスの楽しみは人さまざまであるが、どのような楽しみであれ、それを味わうためには実際に相手と打ち合うという活動をしなければならない。そして打球とは、人が観念的に二重化した意味・価値的世界において、二重化した「もう一人の自分」(目的)を表現する過程であった。

人は、自分がテニスをするのは個人的な楽しみを味わうためであるというかもしれない。しかし、このような主観的な楽しみを求める活動のなかでは、世界と自分を二重化しこれを現実世界に実現する楽しみ、つまり自己表現の楽しみを経験しているのである。テニスの楽しみとは、本質的には互いが相手を意識しながら打球という方法で、自己を表現することに他ならないと考える。

ところで、テニスを習い始めた人は早く上達したいと願望する一方で、上達についての不安感をもつのではなからうか。確かに、練習のなかでは失敗はつきものであり、悲しさや惨めさの経験から逃れることはできない。うまくなる過程では、多かれ少なかれ、誰でも「できない」がゆえの不自由を味わうものである。

この不自由は、初心のため観念世界をつくりだす能力が低く、自分の運動像(目的)を明瞭に思い浮かべることができないため、現実の運動に不調和が生じることを内容とする。あるいは、観念世界で運動像をつくることはできても、その像と現実の運動との間に不一致のあることを内容とする。一言でいうと、何をどうしたいよいかわからない。したがって、思うような運動もできないということである。

しかし練習によって、たとえわずかずつでもうまくなると、不自由さがもたらした悲しさや惨めさは楽しさや喜び、あるいは満足感や充実感に変化するものである。

うまくなるとは、観念世界における自分の運動像を

より具体的で明瞭なものとして思い浮かべる能力の向上を意味している。また、観念世界における「もう一人の自分」と現実世界の自分の運動とがより接近することでもある。一言でいうと、何をすべきかがわかり、思うようなプレイができるようになるということである。

このような変化は、初心者につきまとう不自由を克服する楽しみといてよく、また自分の変化を意識することはそれ自体が楽しみである。さらに、不自由の克服はテニスにおける自己表現能力の高まりと自己表現という楽しみの物質的な深まりでもある。この深まりとは、プレイの間は世俗的利害から開放されて活動に没頭できる自由、および身体を目的的に運動させることができる技術的自由を内容とする楽しみの深まりを意味している。

うまくなることがもつ楽しみとは、このような内容をもつ楽しみである。

4. 結語

社会現象としてみたテニスは、高度に組織化されたものから未組織なものまでの広がりをもっている。そして人は、各人各様の個人的な楽しみを求めてそれぞれの楽しみ方で行う。しかしその個人的な楽しみ基底には、打球のたびに、観念世界および「もう一人の自分」の打球像(目的)をつくりだしては、これを現実世界に表現するという側面が共通に存在している。

行為に先だって、未来を想像し目的を設定するという能力は、人間に固有な能力である。それゆえ、この能力の発揮、この能力の発達は人間一般にとって本質的な楽しみというべきであろう。

テニスの一打一打は、一過的でとるにたらないものかもしれない。しかしそれぞれの打球は、「もう一人の自分」を思い浮かべては、それを実現化する営みである。こうした目的表象とその実現化の繰り返しは、人間に固有な目的設定という能力を発展させる原動力である。

以上のように考えたとき、個人的・主観的な楽しみはそれとして、テニスの本質的な楽しみは

- ①目的を設定し、それを実現する楽しみ
- ②自己表現能力を高めることで、その楽しみを質的に深める楽しみ

と捉えるのが妥当である。

注・文献

- 1) 保健体育審議会：21世紀に向けたスポーツの振興方策について(答申)，p. 5, 1989.
- 2) 日本レクリエーション協会出版課：レクリエーション指導者指導の手びき，p18, 日本レクリエーション協会, 1975
- 3) 「体力・スポーツ」に関する調査(総理府広報室，月刊世論調査，第24巻第5号，pp. 6-7, 1992.) は、下のような調査結果を報告している。このような状況下では、レクリエーション運動のもつ現代的意義は大きい。

精神的な疲労・ストレスを感じている者	52.7%
体力の衰えを感じる者	66.1%
運動不足を感じる者	62.8%

(標本数は2,310人)
- 4) 丹下保夫：体育原理(下)，逍遙書院，1963. および体育技術と運動文化，大修館書店，1985. (明治図書，1963. 覆刻版)
- 5) 荒木豊他：運動文化論，p. 289, 学校体育研究同志会，1974.
- 6) 中村敏雄・高橋健夫：体育原理講義，pp. 67-69, 大修館書店，1987.
- 7) 「打ち合う」ということばは、相手を前提とする打球運動の意味で用い、「打球」は打ち合いを個人の立場からみたときの打球運動の意味で用いる。
- 8) 菅原禮：スポーツ社会学の基礎理論，pp71-79, 不昧堂，1984.
- 9) 藤野涉：史的唯物論と隣倫理学，p82, 新日本出版社，1975.
- 10) 三浦つとむ：弁証法とはどういう科学か，pp. 145-157, 講談社，1983.